

二〇一四年度 卒業論文

金子みすゞと浄土真宗

L110064

田中紗也香

禁 廠

コヒ

目次

序論

本論

第一章 金子みすゞの生涯とみすゞを育てた故郷

第一節 みすゞの生い立ち

第二節 みすゞの人柄

第三節 みすゞを育てた仙崎について

第二章 金子みすゞと矢崎節夫の出会い

第一節 矢崎節夫の金子みすゞ研究

第二節 矢崎節夫と詩 「大漁」

第三節 矢崎節夫と詩 「こだまでしようか」

第三章 金子みすゞの詩と浄土真宗の関係について

第一節 金子みすゞの詩「私と小鳥と鈴と」「さびしいとき」

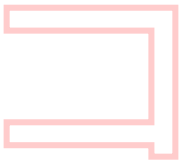
第二節 親鸞聖人のみ教えとみすゞの詩

第三節 みすゞを育てた浄土真宗

結論

序論	1
本論	2
第一章	2
第一節	2
第二節	4
第三節	9
第二章	10
第一節	10
第二節	11
第三節	13
第三章	15
第一節	16
第二節	22
第三節	23
結論	26

禁本



註  
参考文献

コピー — 厳禁

## 序論

金子みすゞ（一九〇三〜一九三〇）という人物を初めて知ったのは、小学生のころに習った「私と小鳥と鈴と」という詩を通してであった。この詩を読んで心がほっこりとあたたかくなったことを覚えている。大学に進学し、講義の中で金子みすゞについて発表することになった。発表をするにあたり、金子みすゞの故郷である山口県長門市仙崎にも足を運んだ。そこでみすゞは二六年という短い生涯の中で、五一二編もの詩を書いていたことを知った。さらに、幼いころから浄土真宗に深いかわりを持つていたことも分かった。私はみすゞと浄土真宗とがどのようなつながりがあるのか、またみすゞが本当に伝えたかったことは何だったのだろうかということを研究したいと考え、卒業論文のテーマにすることを決めた。

第一章では、みすゞの生涯とみすゞの故郷である仙崎について述べる。第一節では、みすゞの生い立ちについて記す。第二節では、小学校時代、女学校時代、童謡詩人、母としてのみすゞの四つに分けてみすゞの人柄について探っていききたい。第三節では、みすゞの故郷である仙崎について述べる。みすゞが見てきたもの、感じてきたものを実際に目にしたいので現地調査を行う。

第二章では、みすゞがこれほどにも世に広まるきっかけとなった人物、矢崎節夫について述べる。第一節では矢崎節夫という人物について記す。第二節では、矢崎節夫が大学一回生のころに読み、衝撃を受け、みすゞ探しの原点となった詩「大漁」について考えたい。第三節では、「こだまでしょうか」という詩を通して、矢崎節夫が今最も大切にしている「こだまをすること」について考える。

第三章では、金子みすゞと浄土真宗の関係について考察する。第一節ではみすゞの代表的な詩を何点か挙げ、そこから浄土真宗とのつながりを見つめる。第二節では親鸞聖人のみ教えとみすゞの詩について述べ、第三節でみすゞと浄土真宗の関係について考えていく。

## 本論

### 第一章 金子みすゞの生涯とみすゞを育てた故郷

#### 第一節 みすゞの生い立ち

金子みすゞ（一九〇三年～一九三〇年 本名テル）は、矢崎節夫著『童謡詩人金子みすゞの生涯』によりながら簡潔にまとめると、一九〇三年四月十一日、山口県大津郡仙崎村（現在の長門市仙崎）にて父金子庄之助、母ミチの長女として生まれた。二歳年上の兄堅助がいた。一九〇五年弟正祐が生まれた。しかし、父はみすゞが二歳の時に亡くなり、下関の上山文英堂の後押しで、金子家は仙崎でただ一つの書店、金子文英堂を始めた。みすゞの弟正祐は一歳のころ、上山松蔵の養子となり、下関にもらわれていった。祖母ウメ、母ミチ、兄堅助、テルの四大家族となった金子家だったが、働き者の母と祖母のおかげで、いつも暖かく、明るい家庭だった。母ミ

チは、もの静かで、優しい声の、心の美しい賢い人だった。祖母ウメは、色白で優しい表情をした、信仰心の篤い人だった。一九一〇年みずぶは南祇園に新築された瀬戸崎尋常小学校に入学した。一九一六年瀬戸崎尋常小学校を卒業し、郡立大津高等女学校に入学した。一九一八年叔母フジが金子家で死去。翌年母ミチは上山松蔵と再婚し、金子家は祖母ウメ、堅助、テルの三人になる。一九二〇年大津高等女学校を卒業。一九二三年、みずぶは下関随一の書店上山文英堂の支店で働き始めた。仕事のかたわら、ペンネーム「みずぶ」で童謡を書き、投稿した。それらの詩はみずぶが二十歳の時、雑誌『童話』等の誌上で西條八十に認められ、若き童謡詩人たちの憧れの星となっていく。一九二六年宮本啓喜と結婚し、一人娘ふさえに恵まれた。しかし、みずぶは、夫から詩作を禁じられ、病気が重くなり、辛い生活のち一九三〇年に離婚した。娘のふさえを引き離そうとする夫に抗い、三通の遺書を残して、同年三月十日、二六歳の短い生涯を閉じた。

みずぶの詩は普段私たちが気づかないこと、忘れかけていることを教えてくれる。「星とたんぽぽ」という詩では「見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ。」とうたっている。これは、幼いころに経験した父の死が大きく関わっていて、亡くなってしまったけれど、自分の心の中では今も、そしてこれからも生き続けているということを表したかったのではないだろうか。みずぶは祖母の影響もあり、幼いころからよくお寺に足を運んだ。そこで見たもの、聞いたものはみずぶの生涯に大きく関わっていると感じる。

みずぶの生涯は二六年間というとても短い時間だったが、現在でもこうしてみずぶの名は残っており、多くの人の心に生き続けている。

## 第二節 みずぶの人柄

みずぶの人柄について、『別冊太陽 金子みずぶ 生誕一〇〇年』と矢崎節夫著『童謡詩人金子みずぶの生涯』によりながら考察したい。

### (一) 小学校時代のテル

おさげ髪で色白で、丸顔の優しいまなざしのテルは、クラスのだれからも好かれていた。成績は優秀で六年間すべて甲。ずっと主席をとおした。先生からの信頼も厚く、一年から六年まで級長を務めている。小学校時代のテルの人柄がよく分かる以下の二人の文章を紹介したい。テルの担任の大島ヒデ先生は次のように語っている。

「とにかく頭の優秀な方で、なんでもできる子でしたが、とくに文学方面の才能があったと記憶しております。国語の方面では、自分から手をあげるとか、私に話しかけるとかいうことはなおさらなかったんですが、でもノートを見ますと、こういうこともしておられる、これも調べておられるといったことがございました。それから算術もようできました」「性格は優しい人で、内向性ではありましたが、口にだされず実行される方でした。心持ちの豊かな、人や友達を愛するというような人でした」「みんなが金子さんをなにかしら心のなかで尊敬していたように見えました」<sup>3)</sup>。

また、みずぶの同級生の岡本トヨさんは次のように語っている。

「金子さんは、それは賢い方でしたよ。一年生のときから教壇の前にて、竹の棒を持ち黒板をさしながら、先生のかわりに『いろは』などを教えてくれました。それから、『金子さん、昨日どんな本を読みましたか。どんなお話か、みんなに聞かせてください』と先生にいわれて、よく話をなさいました。それが本当にお上手でございましたよ。そして楽しゅうございました」<sup>4</sup>。

このように小学校時代のテルは明るく大人しく、成績も優秀でだれからも好かれる人物であったことが分かる。

## (二) 女学校時代のテル

家から女学校まで約四十分の道をテルは一人で通った。友達と一緒に楽しい話も聞けるけれど、悪口や嫌な話もあるので、一人の方が気持ち楽だ、と語っていたという。

友達と話しながら通うと、話すほうに集中してしまい周りの自然まで視線が行き届かない。しかしみずぶは、一人で通っていたことにより、新しい発見や、小さな変化にも気づき自然界へのまなざしがいつそう深まっていたのではないだろうか。毎日同じ道を通っても見方によって変わることもある。みずぶは一日一日変化する景色を楽しんでいる。

## (三) 童謡詩人みずぶ



一九二三年四月一四日、テルは故郷・仙崎から大都会下関に移ってきた。下関の上山文英堂に移り住んだテルは、西之端の商品館にある文英堂の支店で、たった一人の店番として働き始めた。テルは「金子みすゞ」のペンネームで、『童話』『婦人倶楽部』『婦人画報』『金の船』の四つの雑誌に投稿した。ペンネームの「みすゞ」は「信濃の国」にかかる枕詞「みすゞ刈る」が好きでつけた、とテルは弟の正祐に語っている。「みすゞ」という名の語感の美しさ、響きの美しさは、テルの精神性の深い美しさに相応しいものであった。投稿したみすゞの作品は四誌にすべて選ばれ、とくに「お魚」「打出の小槌」がのった『童話』では、選者の西條八十が高く評価した。その後も次々とみすゞの作品は評価され、その感激を次のように書いている。

「童謡と申すものをつくり始めましてから一カ月、おづおづと出しましたもの。落選と思ひ決めてそれを明らかにするのがいやさに、あぶなく雑誌を見ないですごす所でした。嬉しいのを通りこして泣きたくなりました。ほんたうにありがとうございます。」

こうしてみすゞはまたたく間に、日本中の投稿詩人たちの憧れの星になっていった。みすゞの文章を読むと、作品が選ばれたこと、西條八十に認められたことがどれほど嬉しかったか伝わってくる。みすゞは自分の作品に自信が付き、これからもっとたくさんさんの詩を書いていこうと決意したことだろう。

しかし、投稿詩人みすゞのしあわせはそう長くは続かなかった。みすゞの童謡を認め、賞賛し、励ましてきた西條八十がフランスに留学することになったからだ。『童謡』の選者は吉江孤雁に変わったが、孤雁はファンタスティックなみすゞの作風をあまり好まなかつた。そのため、みすゞは投稿を控えていくようになった。

(四) 母として

その後一九二六年みすゞは宮本啓喜と結婚した。一九二六年十一月十四日、娘ふさえが誕生した。ふさえの誕生は、みすゞに生活への新しい希望を与えた。みすゞは、母であることと妻であることに、自分の生活の全てをかけていった。一九二八年正祐はシナリオライターの道を求めて上京した。同じころみすゞは夫啓喜から童謡を書くことと、投稿仲間へ手紙を書くことを禁じられた。結婚してから、「みんなを好きに」を書き、そして「私と小鳥と鈴と」を書いている。矢崎節夫によると、夫に詩作を禁じられた金子みすゞの心境を、こう書いている。

「みんなを好きになりたい」と歌い、「みんなちがつてみんないい」と歌い、夫啓喜に心を向けようとしているみすゞにとって、童謡を書くことで自分を見つめ、反省し、自らを励ましてきたみすゞにとって、啓喜の一言は、みすゞの存在そのものを否定するようなものだった。

夫に理解されなかったみすゞは、それでもあきらめず詩の中で自分の願いを書き表していた。翌年みすゞは、『美しい町』『空のかあさま』『さみしい王女』の三冊の童謡集を清書し、一組を師・西條八十に送り、もう一組を正祐に託した。その後創作することはなかった。

みすゞは啓喜との離婚を決意するまでに追いつめられていた。別れる条件はふさえを手元におきたいということ一つだった。条件をのんで別れた夫だったが、すぐにふさえを渡せといってきた。三月十日に連れにいくという手紙が届いた。親権が、父親にしか認められない時代だった。三月九日午後、みすゞは一人で写真を撮りにい

った。ふさえをお風呂に入れ、たくさん童謡を歌い、それからみんなで桜餅を食べた。二階の自室に引き上げようとしたみずぶは、ふさえの寝顔をのぞきこんだ。「かわいい顔して寝ちよるね」。これが、最後の言葉だった。三月十日、遺書と写真の受取書とを残し、みずぶは二六歳の短い生涯を閉じた。

いのちの大切さや、動物や植物にも人間と同じいものがあることを歌ってきたみずぶを死まで追い詰めたものは何だったのだろうか。「結婚」を境にみずぶにとつて苦しい日々が始まってしまった。娘ふさえの誕生により再び光が見えてきたみずぶだったが、ふさえと離れて生活しなければならぬ現実がみずぶを苦しめたのだろう。みずぶの死後、ふさえはみずぶが願った通り、祖母ミチに引き取られ心豊かな子に育ったが、ふさえの成長をみずぶが見届けることはできなかった。

### 第三節 みずぶを育てた仙崎について

金子みずぶのふるさと山口県長門市仙崎は、山口県北部の日本海に面した北長門海岸国定公園の真ん中にある<sup>7</sup>。二〇一四年八月十六日に仙崎にて現地調査を行った。仙崎という町は三方を日本海に囲まれている。町には金子みずぶ記念館があり、みずぶ通りがあり、各家にみずぶの詩の札がかかっており、町中がみずぶ一色に包まれているようだった。みずぶ通りの中ほどにある旧JA倉庫には平成十六年度から地元に住む若者が中心となり、金子みずぶをモチーフとした大きなモザイク画を制作している。そこには「大漁」の詩が書かれており、今でも仙崎の方々は金子みずぶを大切にしていることが伺えた。

郷土出身の上山大峻は、仙崎の街についてこう記している。

「仙崎という町は、日本海に面した山陰の漁村です。魚を捕って生計をたてるせいか、漁村の人たちはとても信仰心が篤く、仙崎もそんな大きな町ではありませんが、お寺がたくさんあります。・・・人々は現在でも毎日のようにお墓参りをかかせませんし、お寺でお説教があるときは、家族そろって参詣してご聴聞をします。古くから仏様を大事にする習慣の行き届いたところですよ。」

## 第二章 金子みすゞと矢崎節夫の出会い

### 第一節 矢崎節夫の金子みすゞ研究

金子みすゞを研究していくうちに、最も大切な人物がいることを知った。児童文学研究者の矢崎節夫である。矢崎節夫が金子みすゞを再び世によみがえらせたことにより、多くの人の心の救いとなった。矢崎節夫著『童謡詩人 金子みすゞの生涯』によりながら簡潔にまとめると、矢崎節夫は一九四七年（昭和二十二）東京に生まれた。早稲田大学英文学科入学。大学一年の時に『日本童謡集』（与田準一編・岩波文庫）を読み、金子みすゞの詩「大漁」に出会った。大学三年の夏休みに佐藤義美編『大正昭和初期・名作二十四人選』の中で再び金子みすゞの作品に出会った。矢崎節夫は義美にこの時初めて金子みすゞについて聞いた。金子みすゞが下関に住む女性であったこと、西條八十が選者していた雑誌『童話』の投稿家で、義美を含めた当時の若い投稿詩人たちの憧れで

あったこと、そして西條八十のもとに三冊の遺稿集があること、などであった。

佐藤義美は、四か月後の一九六八年（昭和四十三）十二月十六日に六十三歳で亡くなった。一九七〇年（昭和四十五）三十編まとまった作品に三度接する。その後みすゞ捜しの旅はしばらく進展のないまま時間が過ぎたが、一九八〇年（昭和五十五）下関の大学で教師をしていた友人今井夏彦の結婚を期に、年に一、二度下関を訪ねるようになる。何度目かの訪問のあと、金子みすゞという名前で足跡をたどることを諦めたが、みすゞが投稿した住所に書いてあったという「商品館」を探すことを決意する。

それから二年後の一九八二年（昭和五十七）六月四日、今井夏彦から「金子みすゞを知っている人が見つかった」という電話が入った。みすゞを探し始めて十六年、遂にみすゞの実弟の上山雅輔のもとへたどり着いた。雅輔は矢崎に三冊の遺稿集、関連文書、写真、筆跡を手渡した。そこで雅輔から、みすゞの生まれた年数、亡くなった日、金子家の複雑な家族構成、出身地、みすゞはペンネームであって、本名は金子テルであることなどを聞いた。

## 第二節 矢崎節夫と詩「大漁」

矢崎節夫が金子みすゞと初めて出会った詩は「大漁」である。「大漁」はみすゞの五一二編の詩の中心星のような作品である。

「大漁」

朝焼け小焼けだ 大漁だ

大羽鰻の 大漁だ。

濱は祭りの やうだけど

海のなかでは 何万の

鰻のとむらひ するだろう<sup>10</sup>。

私たち人間は海の外しか見ることができない。鰻がたくさん捕れて、漁師たちは祭りのように騒いでいる。それを見て「良かった。良かった。」と思うのが私たち人間である。「海のなかでは／何万の／鰻のとむらひ／するだろう」。この一文を読んではっと気づかされた。みずぶは目線を海の中まで移し、海の中の鰻たちは、捕られていった仲間を偲び葬式をしているのだろうと詠っている。

みずぶのまなざしは、常に相手と同じところにある。例えば、小さな子供に対して、自分は立ったまま話をするのが私たちであつたら、座って子供の目線まで合わせて話しをしてくれるのがみずぶである。中川真昭は『金子みずぶ いのち見つめる旅』の中で次のように見解を述べている。

「いわしを食べて生きなければならぬ人間。いわしだけではなく多くのいのちをいただくかなければならぬ。この哀しくて愚かな人間の姿の、その向こうに、食べられて終えていく、生きとしいけるものたちの姿が 厳然としてたしかに存在するのです<sup>11</sup>。」

本願寺には食前のことば、食後のことばがある。食前のことばは、「多くのいのちとみなさまのおかげにより、

禁 敵

このごちそうを恵まれました。深くご恩を喜び、ありがとうございます。」食後のことばは、「尊いおめぐみをおいしくいただき、ますます御恩報謝にとめます。おかげでごちそうさまでした。」食前のごちそうにあるように「多くのいのち」によって生かされていた。そのことを忘れてしまいがちな私たちに、みずぶは「大漁」の詩を通してかけがえのないのちに生かされていたことを改めて気づかせてくれた。

### 第三節 矢崎節夫と詩「こだまでしょうか」

みずぶがこの世に甦って二七年経った年、未曾有の大震災が起きた。二〇一一年三月十一日の東日本大震災である。家族、友人、大切な人を失った方の悲しみは計り知れないもので、心にぽっかりと大きな穴が空いた。そのような中、被災地の方を元気づけた詩が、金子みずぶの「こだまでしょうか」だった。

「こだまでしょうか」

「遊ぼう」っていうと 「遊ぼう」っていう。

「馬鹿」っていうと 「馬鹿」っていう。

「もう遊ばない」っていうと 「遊ばない」っていう。

そうして、あとで さみしくなって

「ごめんね」っていうと 「ごめんね」っていう。

こだまでしょうか、 いいえ、誰でも<sup>12</sup>。

この詩の情景は、何気ない子供たちのやりとりである。何人かの子供たちがお友達と楽しそうに仲良く遊んでいる。しかし、何かの原因で喧嘩が始まる。お互い拗ねてしまつて強がついていたけれど、あとで寂しくなりお互いに「ごめんね」と謝ることができた。相手だけが、自分だけが一方的に話しているのではなく、お互いが向き合つて会話をしている。こだまは一人ではできない。

矢崎節夫はこの詩について次のように説明している。

「かつて、私たちのまわりにいたおとなの人は、誰かがころんで、「痛い！」といったとき、「痛いね」とこだましてくれました。おかげで、痛さは半分になりました。しかし今、私たちの多くは、誰かが「痛い！」といったとき、「痛くない」「泣くな」といつてはいないでしょうか。これは「私とあなた」というまなざしでしか考えていないことばです。

こだまとは、向かい合った人を、「まるごと認めて受け入れる」「あなたと私」というまなざしのやさしい行為です。だから、やさしいという漢字は、「憂い」のとなりて人がよりそつてこだましている、にんべんに憂い、「優しい」と書くのです。こだますこと、うなづくこと、「優しい」行為を忘れないでほしいです<sup>13</sup>。私たちは「こだまをする」行為を忘れている。親は子供が楽しそうに今日あった一日の出来事を話しているにも関わらず、自分のことだけで精一杯になってしまい、適当に返事をしてはいないだろうか。友達が教室の隅っこで泣いているのを見て見ぬふりをしてはいないだろうか。少しずつのずれが大きくなつてお互いのことを理解する行為を忘れてはいないだろうか。



この詩は「こだまでしょうか、いいえ、誰でも。」という一文で終わっている。このあとに繋がる言葉は何だろうか。「いいえ、誰でも。」このあとには、こだまをすることは、誰にでもできます。だから、誰かが悲しんでいる時や苦しんでいるとき、こだまをすることを忘れないでください、というみずゞのメッセージが込められているのではないかと考察する。

矢崎節夫は最後の一文について次のように説明している。

「こだまでしょうか、いいえ、だれでも」―。こだまを返すのはこだまだけでしょうか。いいえ、私たちは誰でもできるのです、とみずゞさんは歌ってくれています。自分に何ができ、何をすべきか深く考え、こだまするのは今なのです。大きな輪の中の小さなこだまの一つであったとしても、今という時間を数年という長い時間ととらえて、こだまし合い、支え合っていききたいと思えます<sup>14</sup>。

### 第三章 金子みずゞの詩と浄土真宗の関係について

#### 第一節 金子みずゞの詩「私と小鳥と鈴と」「さびしいとき」

みずゞが詠った五一二編の詩の中から、代表的な詩を二つあげ、そこから浄土真宗との関係を探っていく。「私と小鳥と鈴と」は一九九六年四月より小学校の国語の教科書に掲載されるようになり<sup>15</sup>、多くの子どもたちの目に触れられるようになった。

「私と小鳥と鈴と」

私が両手をひろげても、 お空はちつとも飛べないが、  
飛べる小鳥は私のやうに、 地面を速くは走れない。

私がかからだをゆすつても、 きれいな音は出ないけど、

あの鳴る鈴は私のやうに たくさんな唄は知らないよ。

鈴と、小鳥と、それから私、 みんなちがつて、みんないい<sup>16</sup>。

一連でみずぐは「私」と「小鳥」を対比している。私は小鳥みたいに空を自由に飛ぶことはできないけれど、その代り地面を速く走ることにはできる。二連は「私」と「鈴」の対比である。私がどんなに体をゆすつても、鈴みたいにきれいな音は出ないけれど、鈴にはできないことを私は持っている。それは、たくさんの歌を知っていることである。みずぐは決して「私」と「小鳥」、「私」と「鈴」とを比較してはいない。この世に存在するすべての物にそれぞれができること、できないこと、長所、短所がある。そのことを受け止めて相互に理解し合おうとみずぐは詠っている。

タイトルの中でみずぐは最後の「鈴」のあとにも「と」を付けている。なぜ鈴のあとにも「と」をつけたのだろうか。みずぐは世の中にあるありとあらゆるものを平等に見ていた。だからこの詩は、「私」「小鳥」「鈴」の三者だけを取り上げて述べているのではなく、世のすべてのものをわけへだてなく取り上げて詠っていると考察する。最後の「と」について鍋島直樹は、次のように見解している。

「私と小鳥と鈴の三者の関係で終わっているのではないということである。」「と」の後には、あなたも私も入っている。」「と」には、この世界の万物すべてがつかつていっている広さがある。あわせて、一つひとつの存在がどれもかけがえないことを最後の「と」に自然に込めたのだろう<sup>17</sup>。」

この「みんなちがって、みんないい」という一文に心を救われた人は多くいるだろう。私もその中の一人だった。しかし、「みんなちがって、みんないい」とは、相互に得意不得意なものがあるけれど、一人一人個性があるからそれでいいんだよ、自分の好きなように自由に生きていこう、という意味なのだろうか。これについて矢崎節夫は次のように書いている。

「「みんなちがって、みんないい。」というのは、相手の失敗や悲しみを受け止めてあげられる本当に素晴らしい言葉なのです。「みんなちがって、みんないい。」という言葉になるためには、まるごと認めて受け入れて傷つけないことをしなければなりません。「私とあなた」ではダメなのです。「あなたと私」にならないといけないのです。」

つまり「みんなちがって、みんないい。」は「まるごと認めて傷つけない」ことです。違う言い方をすると、すべての人が平等に幸福になるために、「不平等に愛する」<sup>18</sup>ことです<sup>18</sup>。」

すなわち、みずぐが言っている「みんなちがって、みんないい」という言葉の中には、相手を認め合い、尊重し合って生きていくことが大切であるということが含まれている。仙崎の金子みずぐ記念館を二〇一四年八月十六日に訪問して、学芸員に説明を受けて、新たな詩の背景について学んだことがある。みずぐがこの詩を詠った

時期は、一九二六年夫宮本啓喜と結婚して以後、夫に詩作を禁じられるなど、心身ともに不安定な時期だった。したがって、この「みんなちがって、みんないい」という言葉は、夫に訴えている気持ちもあるのではないかと考えられる。

『仏説阿弥陀経』の中には、「池のなかの蓮華は大きさ車輪のごとし。青色には青光、黄色には黄光、赤色には赤光、白色には白光ありて、微妙香潔なり<sup>1)</sup>。」と説かれている。極楽浄土の世界では、青い花は青いままに輝き、黄色い花は黄色いままに輝いているという。それぞれがちがう。しかしみんなすぐれていて、香り高く清らかに咲きほこっている。このように「みんなちがって、みんないい」という金子みすゞのいのちへのまなざしは、すべての存在を分け隔てなく平等に尊重するまなざしであり、「青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光」というそれぞれの花の輝きを示している。

ところで、五一二編の詩の中には「報恩講」や「お仏壇」「花のたましい」など仏さまを登場させて詠っている詩が何編もある。これは幼いころから身近に仏教を親しんでいたからであろう。実際に、浄土真宗本願寺派遍照寺には、みすゞの墓がある。みすゞは家族に連れられて、遍照寺にお参りして、祖母ウメとともに、お仏壇に手を合わせていた。そうしたみすゞの仏教との触れ合いが、彼女の詩に表れているといえるだろう。

次に、もう一つの作品、「さびしいとき」について考察したい。

「さびしいとき」

私がさびしいときに、よその人は知らないの。

私がさびしいときに、お友達は笑ふの。

私がさびしいときに、お母さんはやさしいの。

私がさびしいときに、仏さまはさびしいの<sup>20</sup>。

この詩には、私がさびしいときの他者とのかかわりが書かれている。矢崎節夫の考察を参考にして、この詩を味わってみる<sup>21</sup>。

(一) よその人は知らないの

「よその人」と言われると、家族、親戚、友達、近所の人でもない全くの「他人」のことを指していると考えがちであるが、果たしてみずぐが言う「よその人」は「他人」のことなのだろうか。これについて矢崎節夫は次のように述べている。

「どんなに血のつながりがあるうが、どんなに仲良しの友だちであろうが、どんなにすてきな先生であろうが、こだましてくれない限り、よその人だということです<sup>22</sup>。」

すなわち、家族や親戚、友達であつても「こだまをしてくれる」ことがない限りは「よその人」であるとみずぐは言っている。「こだまをする」ということがどんなに大切なことであるのかが分かる。決断に迷っている時や、悩みがあるときに、誰かに相談をすると、「気持ちが悪くなった」という経験は誰にでもあるだろう。これは、相

禁蔵

手に自分の気持ちを伝えることによって、相手が私の悩みを軽減させ、背負ってくれたからである。

(二) お友達は笑うの

私がさびしそうな表情をしていると友達は、察してくれる。そして寂しそうにしている自分を元気つけようとして明るく振舞ってくれる。しかし友達には、何があっても、なぜさびしいのかを言葉で伝えなければ私のさびしさが分からない。言葉というのは人類が生み出した最大の道具であるが、自分の気持ちを文章にして伝えるのは難しい。そのため、すべてを理解してもらうには、言葉だけでは伝わらないことがある。

(三) お母さんはやさしいの

わたしがさびしいとき、お母さんは何も聞いてこないけれど、言葉で伝えなくても察してくれる。そしてそっと優しくしてくれる。母親というのは私にとって最良最善の存在であり、私の一番の理解者である。

ただ実際には、上山大峻の研究によれば<sup>23</sup>、みずぶの母はいつも忙しく、話を聞いてほしいけどゆっくりとした時間がない不満をもっていたとも述べている。

(四) 仏さまはさびしいの

私がさびしいときに仏さまもさびしい、つまり私のさびしさを半分にしてくれる。私のさびしさを仏さまは丸

ごと受け止めてくれる。みずゞは、仏さまの優しさやぬくもりをこの詩で伝えていると考察する。

## 第二節 親鸞聖人のみ教えとみずゞの詩

みずゞの詩はどの作品を読んでも、心がほっこり温かくなる。みずゞの優しさに包まれている。みずゞの優しさ、すなわち慈悲の心について考察を深めていきたい。

慈悲とは『観無量寿経』に「仏心とは大慈悲これなり。無縁の慈をもつてもろもろの衆生を撰したまふ<sup>24</sup>」と説かれているように、「あなたの悲しみ（いたみ・苦しみ）は、わが悲しみであり、あなたによるこびは、わたしの喜びである。」という同悲同喜、同感していく心情である<sup>25</sup>。みずゞは人間だけではなく、動物や植物、ありとあらゆるものにまで視線を向け、その喜びや悲しみを一緒に味わった。

ここで親鸞聖人（以下親鸞）の心を唯円が伝えた『歎異抄』第四章によりながら、親鸞の「慈悲」の理解について考察したい。

「慈悲に聖道・浄土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし。浄土の慈悲といふは、念仏して、いそぎ仏に成りて、大慈大悲心をもつて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。今生に、いかにいとほし不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば、念仏申すのみぞ、すゑとほりたる大慈悲心にて候ふべきと云々<sup>26</sup>。」

自分なりに現代語訳すると次の通りである<sup>27</sup>。「慈悲には、聖道の慈悲と浄土の慈悲との違いがあります。聖道門の慈悲とは、人々や生き物をあわれみ、いとおしみ、大切に守り育てることです。しかしながら、どれほど頑張っても、思うように相手を助けることはほとんどできません。浄土門の慈悲とは、念仏して、はやく阿弥陀仏の本願に救われて、仏となり、大慈悲心をもって思う存分人々を救うことをいうのです。この世でどれほどかわいそうと思っても、承知の通り、相手を助けることは難しいですから、聖道の慈悲は一時的で徹底しません。だからこそ阿弥陀仏の本願に救われて、念仏を称える身になることのみが、徹底した大慈悲心なのです、と親鸞聖人は仰せになりました。」

このように親鸞は、この世界での慈しみは、どれほど相手を思っても限界があるとし、だから仏の大悲にいかれて、念仏して、自らが仏となって、すべてのものを救いたいと明かしている。「私がさびしいときに、よその人はしらないの。私がさびしいときに、お友達は笑ふの。」は、聖道の慈悲のように、相手を思いやることのむずかしさを示しているように思われる。それに対して、「私がさびしいときに、お母さんはやさしいの。私がさびしいときに、仏さまはさびしいの。」は、浄土の慈悲のように、大いなる慈悲がさびしい私を包んでいるぬくもりを感じさせてくれる。

### 第三節 みずぶを育てた浄土真宗

第一章でも述べたように、みずぶの祖母ウメは信仰心の篤い方だった。



遡ってみると、仙崎あたりの山口県北部は、大変古くから子供たちに日曜学校を開いていた。先行研究を参照すると<sup>28</sup>、大日比（おおひび）の西円寺で一七七九年（安永八）から小兒念仏会が開かれ、毎月五日にお寺に子供を集めて法話、童話を聞かせて、仏様に供えた菓子を配り、念仏する集いが催されていた。日本研究者のチャールズ・ダンは一九六七年（昭和四十二）に、この小兒念仏会が世界で最古の日曜学校であろうと述べているほどである<sup>29</sup>。

古荘匡義の研究論文によると<sup>30</sup>、仙崎は、江戸時代に日本でも有数の捕鯨基地として栄えた港町だった。この町の向岸寺には一六九二年から明治時代まで、捕獲した鯨に人間と同じように法名をつけた鯨の過去帳が残されている。さらに、捕獲した鯨が胎児をもっていたときは、これらを埋葬して建てた鯨墓が今も残っているという。このような鯨墓は仙崎の他に全国に五〇基を数える。しかし、七十数頭もの鯨の胎児を埋葬したところは仙崎より他にないという。そして鯨法会は過去のことではない。注目すべきことは、仙崎では今も絶えることなく、鯨法会が行われていることである<sup>31</sup>。

みずぶの詩の中にも「鯨法会」について詠われた詩がある。

#### 「鯨法会」

鯨法会は春のくれ、

海に飛魚採れるころ。

濱のお寺で鳴る鐘が、

ゆれて水面をわたるとき、

村の漁夫が羽織着て、

濱のお寺へいそぐとき、

沖で鯨の子がひとり、

その鳴る鐘をききながら、

死んだ父さま、母さまを、

こいし、こいしと泣いてます。

海のおもてを、鐘の音は、

海のどこまで、ひびくやら<sup>32</sup>。

春のくれのまだ肌寒い季節、漁師たちは羽織を着て濱のお寺へ急ぐ。鯨を捕って生計を立てていかなければならない漁師たちは、漁獲した鯨の命へのいとしい想いを僧侶とともに手を合わせてお念仏した。この詩の三連、四連では、父や母を亡くし海に残された子の気持ちについて詠っている。中川真昭の研究書を参考に考察すると<sup>33</sup>、いのちの重みや大切さを深めていけばいくほど、親と別れ、ひとりぼっちになってしまった子どもの鯨の寂しい気持ちだが、二歳という幼さで父を亡くしたみずぐ自身と重なっていると考える。みずぐは「いのちの大切さ」について人一倍敏感だったと言える。

禁 廠

## 結論

金子みすゞを育てた山口県長門市仙崎という町は古くから仏さまを大切に作る習慣が行き届いており、信仰心の篤い方が多い町である。みすゞの祖母も信仰心の篤い方だった。祖母の影響でみすゞは幼いころからお寺に行き、お仏壇の前で手を合わせる機会が多かった。みすゞの耳には自然と浄土真宗の教えが入ってきたのだろう。「さびしいとき」や「お仏壇」、「花のたましい」は詩の中に「仏さま」という言葉が出てくる。二歳という幼さで父との別れを経験したみすゞの心には、なにか心に響くものがあつたに違いない。

みすゞは愚かで自分勝手な私たちに向けて、「自分は自分のままでいい」と詠ってくれた。しかしそこには、相手に対する「思いやり」が最も大切であるというみすゞからのメッセージがある。だからもし困っている人がいたら助けに行く。自分の好きなように生きるのではなく、目の前にいる相手と手を取り合って、協力し合いながら生きていく。今私たちがしなければならないことはこういうことではないのだろうか。

私たちは自分の足でこの地に立っている、自分一人で「生きていく」のだと思いがちである。私という一人の人間が今日まで無事に過ごすことができたことは、何百、何千、何万ものいのちをいただいていたからに他ならない。いのちを私に預けてくださった多くの生き物たちがいたから私は今ここにいます。金子みすゞの研究を通して生かさせていただいていることを忘れずに、一日一日を無駄にすることなく精一杯生きたいと強く感じました。

註

- 1 矢崎節夫著『童謡詩人 金子みすゞの生涯』三四八頁
- 2 金子みすゞ著『金子みすゞ全集』二〇八頁
- 3 前掲書八二頁
- 4 前掲書六九頁
- 5 前掲書一七八頁『童謡』大正一二年十一月号
- 6 前掲書二九七頁
- 7 前掲書三一頁
- 8 金子みすゞ関連ホームページ参照。 <http://www.nanavi.jp/page/detail.php?id=308> 二〇一四年八月十六日
- 9 上山大峻著『金子みすゞものがたり 心のふるさと』七〜九頁
- 10 金子みすゞ著『金子みすゞ全集』一〇一頁
- 11 中川真昭著『金子みすゞ いのち見つめる旅』十一頁
- 12 金子みすゞ著『金子みすゞ全集』二二七〜二三八頁
- 13 矢崎節夫・萩原昌好編、『日本語を味わう名作入門2 金子みすゞ』二十頁
- 14 山口県長門市『金子みすゞ こころのふるさと』二頁
- 15 矢崎節夫『金子みすゞの一一〇年』一三〇頁
- 16 金子みすゞ著『金子みすゞ全集』二一四五頁
- 17 鍋島直樹「金子みすゞ 死を超えてつづくもの」一三頁、龍谷大学人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター二〇一二年年度年次報告書

禁 蔵

- 18 矢崎節夫「あなたはあなたでいいの　うれしい金子みすゞさんのまなざし」四三頁
- 19 『註釈版』一二二頁
- 20 金子みすゞ著『金子みすゞ全集』四一七六頁
- 21 矢崎節夫著『みすゞコスモス2　いのちこだます宇宙』十九頁
- 22 前掲書二十五頁
- 23 上山大峻著『金子みすゞがうたう心のふるさと』七三頁
- 24 『註釈版』一〇二頁
- 25 姫路龍精『詩情の底に流れる慈悲』二五〇二六頁
- 26 『歎異抄』第四章、『註釈版』八三四頁
- 27 梯実円著『聖典セミナー歎異抄』参照
- 28 古荘匡義「金子みすゞの生命観と大正生命主義」五二頁
- 29 長門市史編集委員会『長門市史　歴史編』九九八頁、長門市、一九八一年。前掲論文で紹介している。
- 30 古荘匡義「金子みすゞの生命観と大正生命主義」五二頁
- 31 金子みすゞ　鯨法会に関するホームページ。http://blogs.yahoo.co.jp/yosh0316/49110352.html　二〇一四年十月十五日
- 32 金子みすゞ著『金子みすゞ全集』第六卷三八〇三九頁
- 33 中川真昭著『金子みすゞ　いのち見つめる旅』五七頁

禁 廠

コピ

参考文献

書籍

- 矢崎節夫 『童謡詩人金子みすゞの生涯』 JULA出版局 一九九三年
- 矢崎節夫 『ほしとたんぼぼ』 JULA出版局 一九八五年
- 矢崎節夫 『別冊太陽 金子みすゞ 生誕一〇〇年』 平凡社 二〇〇三年
- 金子みすゞ 『金子みすゞ全集』 Ⅰ JULA出版局 一九八四年
- 金子みすゞ 関連ホームページ参照。 <http://www.nanavi.jp/page/detail.php?id=308> 二〇一四年八月十六日
- 上山大峻 『金子みすゞものがたり 心のふるさと』 自照社 二〇一一年
- 中川真昭 『金子みすゞ いのち見つめる旅』 本願寺出版社 二〇〇三年
- 金子みすゞ 『金子みすゞ全集』 Ⅲ JULA出版局 一九八四年
- 矢崎節夫・萩原昌好 『日本語を味わう名作入門2 金子みすゞ』 あすなろ書房 二〇一一年
- 矢崎節夫 『金子みすゞの百年』 JULA出版局 二〇一三年
- 浄土真宗本願寺派 『浄土真宗聖典―註釈版 第二版―』 本願寺出版 一九八八年
- 酒井大岳 『金子みすゞの詩とたましい 生きる力がわく40の詩と仏さまのことば』 静山社 二〇一

一年

矢崎節夫 『みすゞコスモス わが内なる宇宙』 JULA出版局 一九九六年

金子みすゞ 『金子みすゞ全集』Ⅱ JULA出版局 一九八四年

矢崎節夫 『みすゞコスモス2 いのちこたえます宇宙』 JULA出版局 二〇〇一年

上山大峻 『金子みすゞがうたう心のふるさと』 自照社 二〇一一年

姫路龍正 『詩情の底に流れる慈悲』 探究社 二〇〇三年

梯実円 『聖典セミナー歎異抄』 本願寺出版 二〇〇七年

金子みすゞ 『金子みすゞ童謡全集』第六卷 JULA出版局 二〇〇四年

金子みすゞ 鯨法会に関するホームページ。 <http://blogs.yahoo.co.jp/yosh0316/49110352.html> 二〇一四年十月十五日

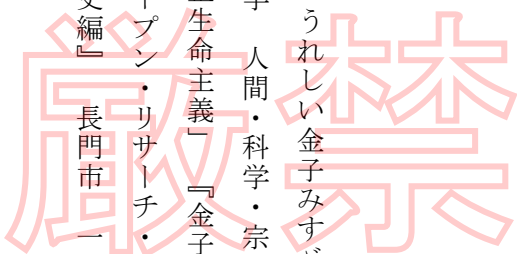
『金子みすゞ童謡全集』第六卷 JULA出版局 二〇〇四年

酒井大岳 『金子みすゞの詩とたましい 生きる力がわく四〇の詩と仏さまのことば』 静山社 二〇一

一年

## 論文

鍋島直樹 「金子みすゞ 死を超えてつづくもの」『龍谷大学人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター』 二〇一二年年度年次報告書 二〇一三年



矢崎節夫 「あなたはあなたでいいの うれしい金子みすゞさんのまなざし」『金子みすゞいのちへのまなざし―「星とたんぽぽ」―』 龍谷大学 人間・科学・宗教オーブン・リサーチ・センター 二〇一二年

古荘匡義 「金子みすゞの生命観と大正生命主義」『金子みすゞいのちへのまなざし―「星とたんぽぽ」―』 龍谷大学 人間・科学・宗教オーブン・リサーチ・センター 二〇一二年

長門市史編集委員会 『長門市史 歴史編』 長門市 一九八一年

コピー